双葉新書

総長への道 凶徒之章

藤原審爾

総長への道 凶徒之章　　（検印廃止）

双葉新書　380円

昭和47年3月1日　初版発行

著者　藤原審爾（ふじわらしんじ）
東京都杉並区天沼2の38の4

発行者　瀬川雄章

発行所　株式会社双葉社
東京都新宿区神楽坂1の8
（郵便番号　162）
電話東京（268）5111（代表）
振替東京 117299

印刷所　慶昌堂印刷株式会社
東京都文京区水道2の4の26

製本所　株式会社川島製本所

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします
0293—600065—7336

総長への道

凶徒之章

藤原審爾

双葉新書 FUTABASHA

© 藤原審爾 1972

目次

怨念 5
身のほど 37
央子 65
鞘あて 93
毒男 106
蜘蛛の十郎 124
女の一念 164
腐臭 184
蟲の息 207
果し状 229

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

装幀　田代　光

（関東前田一家）

前田勇蔵

- 三津組（桐生足利）小岩の喜代三
- （前橋高崎）前田信次郎—妻・美根子
- 大宮一家（大宮）不動の龍太郎
- 大松一家（王子）獅子の兼蔵
- 峠一家（巣鴨）峠の淳平
- 粕屋（池袋）小笹の哲—小林捨八郎

怨念

博多長浜のはずれの闇市の裏に、でっかい屋敷が一軒建っている。

建ったばかりの新しい家である。

真夜中の一時をすぎた頃だが、焼跡の一軒家のようなその屋敷には、煌々と灯が点り、まるで不夜城のようである。

武家屋敷のような門の門柱には、

森川組

という表札がかかっている。

その表門の潜戸をくぐると、広い表庭。

そのむこうに玄関がある。

階下、十部屋の奥づまりの部屋で、卅がらみの小ぶとりの、色っぽい女が、大きな座卓の前で、金勘定をやっている。
座卓の上に、札束や小銭の山が竝んでいる。
薄物の紫紺の単衣の女のうしろには、床の間があり、芍薬の花が生けてある。
女は、うたである。
関門トンネルの下請と、うたがはじめた娼家で、森川は大儲けをし、その金で山を買っていたのが大当りした。
戦争中は、軍需工場の建設で稼ぎまくり、敗戦後は、もと長崎組の繩張りだった港界隈へ乗りだし、闇市、鉄火場、キャバレー、進駐軍相手の娼家から、数えきれないほどの仕事をやっている。
本業の土建業のほうは、
九州大建設株式会社
と名を改め、森川は筆頭株主で、会社は従弟で永らく県廳で働いていた男にまかせてある。
森川組のほうは、うたが独りで営っている。
夜の十時をすぎた頃から、ショバ代やその日の売上げを、若い者が次々に届けにくる。勝手口の横にある部屋で、この家に寝泊りしている用心棒たちと若い者が、それを受取りに出かけたりもする。
そしてその金が、うたのところへ届くのである。
うたは、それを計算し、帳面へつけ、金を金庫にしまう。
それが終るのは、毎日、暁方である。

森川は、本宅暮しで、めったにここへは姿を現わさない。とくにこの頃は、若い女が出来て、天神のほうへ入りびたりである。

うたは、もともと好きで一緒になったのではないから、別に気にしてもいない。むしろ、がっぽり稼いで、東京へ帰ろうと考えている。

うたは、十郎にひどい目にあってから、男を信用しなくなり、色恋をあてにしなくなっている。すっかり人が変ったんだ。

それでうたは、欲得で人をつかうだけになり、たった十円の金をくすねただけで、リンチをするのである。

昨日までうたのお気入りだった男が、今日は打ちのめされたりする。そんなとき、うたは、鵜の毛ほども用捨しないので、若い者からおそれられている。

二時をすぎたその頃、うたの部屋へ、若い者をとり仕切っている、幹部の野地が顔をだした。

野地は、もと小倉のやくざの花井一家の若者頭だったが、女のことで兄弟分を怪我させて破門になった男で、なかなか整った顔をしている。

野地が、森川組にやくざのしきたりを、もちこんできて、鉄火場をつくったりした張本人なのである。

野地は、部屋の外から障子をあけ、廊下へ坐って、声をかけた。

「あねさん」

なかなかきちょうめんである。

「なんだい」

「いま花世界から電話で、またれいの野郎が、くだをまいてるっていうんですよ。どうしましょ

う」
「しつこいね」
「そうなんで」
三日前、その片腕めっかちの丹下左膳のような野郎が、森川組の遊戯場へやってきた。射的場で、三十発三十命中百円というのを、とりっぱなしで、三千円もかせがれ、それで若い者が、このあたりでやめてくれと言うと、とたんに居直り、五千円包めばやめてやる、それでなけりゃ毎日くるぜと言いだした。ナメるなと、裏の焼跡へ連れだしたのだが、三人たちまち蹴飛ばされ、あっけなくのばされてしまい、とうとう五千円ふんだくられた。
そいつがあくる日には、花世界で客をおどかし、今夜は看板だというのに、帰ろうとしないのだそうである。
「なんかうちの組へ怨みでもあるのかい、そいつは」
「そうでもねえようです、よそでも野郎に手を焼いたそうなんですからね」
「いちど念入りに痛めつけちゃどう。片腕ってンだろう、残りのほうを斬っちまえば、おとなしくなるだろうよ。十人ばかり腕っ節の強いのを連れていって、かたづけるんだね」
「もう一つ、厄介なことがあるんですよ」
「なんだい」
「へえ、実は、刺青があるんで、もしかすると、横井のところの廻し者じゃねえかという者もいますンでね」
「刺青だってピンからキリまであるよ、どんなのだい」
「蜘蛛の刺青なんで」

うたの顔色が変った。
「蜘蛛だって」
「へい」
「片腕片目だといったね」
「そうなんで」
「人違いかもしれないが、心当りがあるンだよ。ともかく十人ばかり連れていって、そいつを抑えといとくれ。あたしもすぐあとから行くよ。そいつにゃ、あたし、怨みがあるんだ。逃すンじゃないよ」

花世界は、大衆キャバレーで、十一時半が看板だが、地下のバーのほうに、十二時すぎまで、内密の営業をやっている。
十一時すぎになると、そこへ少々やばい仕事をやっている連中が集まりだす。
密輸の連中とか故買人などから、倉庫荒しといった連中まで、どこからともなく集まってくる。
そういう連中のために、スタンドのほかに、テーブルがあちこちにおいてある。
その広いバーのスタンドの中だけに、灯が点っており、白い上着のバーテンが、おどおどした顔で相手をしている。
客は四十がらみの着流しの男で、大きな刀傷のあとが、顔の左側の、額から目の上をとおり頬までのびている。すごい顔で、昔の面影はなく、見るからに凶暴な狼みたいに変っているが、まぎれもなく駒形の十郎である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

スタンドの端のところへ、ボーイが二人、突っ立っているほかは、客は一人もいない。客がくると、十郎が、ふらふらその席へ近づいて行き、じろじろと見るので、誰もすぐに居たたまれなくなり、帰ってしまうのである。商売はあがったりだ。

二時ごろ、上の事務所の連中が、追いだそうとして、あべこべにぶっ飛ばされてしまった。それに射的場での噂の男だとわかり、みな尻ごみして、とうとう居直られてしまった。

「話のわかるやつを呼んで来い」

とわめきだしたのである。

ひとしきりわめいて、いまはちょっとおさまり、十郎は、上等な洋酒をがぶがぶやりだしている。

そこへ漸く野地たちが、十人ばかり人手を集めて、乗りこんできた。

十人も揃っていると、心強くて気も楽なんだ。腕自慢の大柄なのが、いつもの調子で、つかつか十郎のとこへ近より、

「おい、兄貴、ちょっと顔を貸してくれよ」

ぽんと気軽く肩を叩いた。

とたんにその野郎が、そこで棒立ちになった。

どてっ腹へ、ハジキがぐっとおしつけられたんだ。

今度は、十郎が野郎の顔を見て言った。

「てめえみてえな餓鬼に、肩を叩かれるいわれはねえ」

十郎の声はしゃがれて低く凄味がある。

「す、すみません」

「そうびくつくこたァねえよ。弾が入ってねえかもしれねえだろう」
「――――」
「こけおどかしのオモチャってこともあるだろう」
「――――」
「おめえ、どっちだと思う？」
「――――」
「賭けてみろ」
「――――」
「返事しろい」
「ほ、ほんものです」
「そうか、それじゃ引金をひいてみるぜ」
野郎は悲鳴のような声をあげた。
「助けてくれっ」
ほとんど同時に銃声がし、野郎は、
「うわっ、やられたっ」
とぶっ倒れ、床で腹をかかえて転げまわった。
十郎は、ハジキ片手に、もう立ちあがっていた。
せせら笑って、そいつを呶鳴りつけた。
「ばか野郎、弾は、腹をかすっただけだ、がァがァ騒ぐなっ」
それで野郎は、床に坐って腹を調べだした。

十郎は、あっ気にとられた野地たちへ、むき直った。
「どうした、てめえ達、かかって来ねえのか、えっ」
野地も、流石に声が出なかった。口の中はからからだ。
「あと、七発しかのこってねえンだ。来いよ、二、三人は助かるぜ」
むろん返事がすらすら出来るような、命をはなからはっている野郎はいない。
「来いったら来いよ」
十郎が一歩踏みだすと、二歩連中はあとずさりした。
ほとんど同時に、
「なんだい、おまえ達、情けないね」
と吐きだすような声がし、うたが、連中をかきわけて、前へ出た。
十郎が、あっという顔になった。
「こんな片輪ひとりに、なんてざまさ」
うたは、それから十郎の前に近づいた。
うたの目は、怨みで燃えていた。
「撃てるなら撃ってみな」
十郎は複雑な苦笑いをした。
笑うと、傷あとがひきつり、十郎の顔は醜くゆがんだ。
たいていのことなら、自分のことを棚にあげ、相手のせいにするたちなのだが、十郎もうたにだけは、文句のつけようがない。金をせびったこともなければ、面倒なことを頼んだこともない女だ。それをだまして金を持ち逃げしたんだから、いくらなんでも気がとがめている。

「撃てないのかい、撃てないのなら、そんなものしまったらどうなのさ」
十郎は、むっとした顔になった。
しかし、しぶしぶ、ハジキをふところへしまった。
もうそのときには、そんな十郎の背後で、ボーイの一人がビール瓶をふりあげていた。
ボーイは、そのまま、思いきりビール瓶を振り下した。
ビール瓶がくだけ散り、それと一緒に、十郎の軀が、どさりと床へ転がった。

十郎は、間もなく、意識をとりもどした。
がたがた軀が揺れており、エンジンの音も聞えてきた。
車の中だ
どこへ連れて行く気だろう
殺られるかな
十郎は、左右に男がおり、がんじがらめに縛られている自分に、すぐ気がついた。
もう長い間、車にのせられていたのかと思ったが、そうではなかった。
運転している若い男が、
「何処へまいりましょう」
というのが、そのとたん聞えてきた。
「そうだね」
とうたの声が、前の助手席でした。

「うちへ行っとくれ」
「かしこまりました」
ちょっと間をおいて、隣の男が、
「あねさん」
とうたをよんだ。
それで十郎は、ほうっと思った。
森川の女房か。こいつは驚いた、
女はらくなもんだな。
「連れて帰るより、どっかで始末したほうが、いいンじゃねえンでしょうかね」
片っぽうのもう一人が、
「金さんとこへ頼めば、絶対ですよ。あいつは、アメ公に頼んで、船で沖へ捨てさせるンですよ」
「そのくらいのこたァこっちだってやれるぜ」
「沖ったって佐世保から出て、南支那海のほうで、捨てるんだそうですよ」
「いくらでうけあうんだ」
その時、うたが口をはさんだ。
「こいつにゃ、怨みがあるんだ。それにこいつは、以前、横井のところにいたことがあるんだから、殺っていいかどうかね。よく調べたうえでなきゃね」
「やっぱり横井の野郎が、こいつをあやつっているんですかね」
「そうだとうるさいからね」

「そうですね」
十郎は、ほっと一ト息ついた。
うたは、利口だ。殺る気があるなら、だいいち一緒に乗ってきたりはしない。
わざわざ乗ってきたのは、助ける気があるからにちがいない。
十郎は、ぐったり気をうしなったふりをしながら、心の中でにやにやしだした。
どうやら横井と森川は、モメているらしい。そこで、横井の名をだせば、この連中はことを構えたくないンで、これ以上の目にあわさないらしい。
それをうたは、暗に、十郎へおしえているのだった。
教えるわけは、いろいろあるのだが、こんなとき十郎は、昔から身勝手なことしか考えない。
その癖はちっとも治っていなかった。
十郎は、ぐったり野地へもたれかかったまま、
うたは、おれを助けたがってるぜ
おれに惚れてやァがるぜ
女は、やっぱり女だなァ
十郎、それからうたとの閨の中を、しつこく偲びだした。
うたは、ぐあいがよく、気違いみたいになる。
このところ十郎は、さっぱりいい女に恵まれていないもんだから、次第にもよおしてきはじめた。
しかしそいつは、とんだ思いちがいなのだった。
十郎が偲んでいるようなうたは、どこにもいなくて、とっくに別のうたが出来上っている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo